

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	伯夷頌を読む : 雑録
Author(s)	大野, 禧一
Citation	龍南會雑誌, 42 : 20 - 31
Issue date	1895-12-26
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/4752
Right	

ありと雖も、やゝ之を疑ふ者も生じ、且つ俗身に入り難き教説は、普く天下に及ばず。勢ひ人民はこの説を遠け、こゝに一層接近し得べき神を要むるに至れり。又古代の經典に於て既に多神の所説を萌芽せるが故に、忽ちにし冥想的哲學、凡神教的教義は多神教的教義と變じぬ。彼等は「若し神に去て總ての物ならば、總ての物は亦神たるべきこと明ならずや、」と考へぬ。「梵天王は實に睡眠の狀態にあるか。之に祈禱を捧げてはた何の効ぞある。彼にして吾人を距る遠く、且つ目以て視るべからずとせば、普く之を措きて、茲に間近き山川草木禽獸を禮拜せよ。そは吾人は禮拜せざるべからざるものなればなり、」とは印度人民の意向なりき。是に於てか、驚くべき數の諸神は、印度人民の禮拜する所となりき。

伯夷頌を讀む

大野禎二

伯夷の頌一篇、その由来を詳にせず。然れども文王拘れて周易を演べ、仲尼厄して春秋を作り、屈原放れて離騷を賦す。徹徹た一篇の文と雖も、その出づるや、必らず故なくんばあらず。韓文公、絶世の奇才と滿腔の熱血とを揮て、國家百年の大計を爲さんと欲す。無學の徒、これを毀り、斗筭の人、これを嗤ふ。是に於て、奮然起て筆を下す。伯夷頌一篇、蓋是なり。層々行文の間、その自信と本領との、滔々として流露するを見る。請ふ、暫し、余をして彼が自信と本領とに就て語らしめよ。

彼が自信

骰子を投じて、これをその前方より望み、その二なるの故を以て、六面皆二なりといふ非なり。之

を其後方より見、其五なるの故を以て、六面皆五なりといふも、亦非なり。之を左方より見て以て三となし、右方より見て以て六となし、上より見、下より望みて以て、或は一となし、或は四となす、皆非なり。是其故何ぞや。一方より望みて、以て其真相を鑿てりと爲せばなり。凡物の真相を判す、之を前後より望み、左右より觀、上下より察せざるべからず。世人皆之を知る。然れども、獨、人物を評するに至ては、則然らず。其一班を捕へて、其全豹を評し、恬然として耻づる所なきなり。夫、人を評す、豈只に之を前後より見、左右より望み、上下より察するのみならんや。之を内に質し、之を外に驗せざる可らず。之を近きに見、之を遠きに察せざる可らず。之を今日に推し、之を他日に較せざる可らず。今、春花を捕へて、秋も亦此くの如うらんといふ非なり。秋花の、春、花なきを見て、花咲かずといふ、亦非なり。今夫、木の本性を知らんと欲せば、之を春に見、夏に察し、秋に課し、冬に規はざる可からず。植物形態發育生理の用を知り、之を四季に徴す。於是乎、初めて確として誤ることなかるべし。然れども、人物を評す、又此くの如く容易ならざるなり。他に一個難事のあるあり。難事とは何ぞや。評者見識の如何、是なり。

夫、青色の眼鏡を掛けて萬有を望み、萬物を以て青色と爲す、非なり。紫綠黃赤の眼鏡に於けるも亦然り。今、見識は人の眼鏡なり。若、見識に高下の區別あらば、その眼鏡に、青紫綠黃赤色の別なきを得んや。この眼鏡を掛けて、萬有を望む、一人は以て青と爲し、一人は以て紫と爲す、或は綠と爲し、黃と爲し、赤と爲す。その同色に見ゆるものは、以て相雷同し、その異色に見ゆるものは、互に相誹謗す。紛々擾々定る所を知らず。而も其物の真相に至ては、毫末も初より變せざるなり。此くの如く、それ然り。故に同じく、一個の我なり。或は好物惡むべしと爲す、或は豪骨愛すべしと爲す。或は陰險恐るべしと

爲之、或は方策喜ぶべしと爲す。或は灑落談すべしと爲し、或は輕卒遠くべしと爲す。而も我真相に至ては、未だ曾て毫末も初より變せざるなり。然るを今、人言によりて、或は善となし、或は惡となし、以て自ら喜憂を爲すものあらば、誰ら其愚を笑はざらんや。

善惡は道に在り。人に在るにあらざるなり。然れども、時により人に在り。夫、賢人君子は、學よく道を知り、行よく道を戴す。今この人を以て、我を測る、何ぞ道を以て我を測るに異ならんや。是時、善惡は人に在りと謂ふも、亦宜し。聖人乃萬世之標準也といふも、これが爲めのこゝ。然れども、賢人君子は遂に人にして道にあらざるなり。故を以て、徒に、その人たる賢人君子を以て我を測り、その本体（標準）たる道を忘ることあらば、其非なる、固より言ふを待たず。然れども、世多くは賢人君子を以て、已を測ることすら且之を忘れ、頻りに時俗の言によりて左右せらる。道を以て已を測ること、只自信の士に於て之を見るのみ。而もて世の時俗の言によりて、左右せらるゝ所以のもの、大に故あり。請ふ少しく之を述べん。

人の此世に出るや、其始は無邪氣純潔なること、野邊に咲ける一輪の草花に似たり。彼、未だ世の風波に誘はれざるなり。其幹莖未だ屈曲せざるなり。其性質未だ混濁せざるなり、雜駁ならざるなり。故に、其周圍のものを見るや、其既に世の風波に誘はれたるを知らず、其幹莖既に屈曲せるを知らず、其性質既に混濁雜駁なるを知らず、認めて以て曰れと等々とす。故に稱して以て善と爲せば、我善ならんを疑ひ、稱して以て惡と爲せば、我惡ならんを疑ふ。而も、其善の必しも善ならず、其惡の必しも惡ならざるを知らざるなり。彼が曲を以て、我が直を譏り、彼が秋凋を以て、我が春緑を誹るを知らざるなり。褒れば喜び、貶れば憂ふ。惴々として、常に危戚の感を爲し、煩悶憂悵、死に至るまで悟らず。

陽明嘗て歌ふて曰く、

人人自有定盤針、

萬化根元總在心、

却笑從前顛倒見、

枝々葉々外頭尋、

是固より、世人が良知の其心底に在るを知らず去て、空しく他處に向て尋ぬるの愚を笑ひたるものなれども、移して此等世人の評となすを得べきか。

事体此くの如し。今夫、英敏達識の士に至ては、則然らず。其彼を知り、我を知るや早し。忽にして彼等の既に、世の風波に誘はれたるを知る。其性質既に混濁せるを知る、雜駁なるを知る。故に其標準を求むるや、他(道)に於てして、此(世人)に於てせざるなり。於是乎、よく卓然として、世情に超越し、人の褒貶に、危戚の感なきことを得。是、古より絶大の事業を成せる大人豪傑の士に於て見る所にし、余又實に之を韓文公に於て見る。

韓文公年譜に曰く、文公生れて僅に三歳、父母を失ひ、伯兄會により、七歳隨て秦に至る。十二歳、會の官を貶せらるゝに隨て、韶州曲江に至り、兄また卒し、嫂、鄭氏により、北に旋り、中原事あるによりて、食に江南に就く。十九歳、京師に至り、三歳三たび試みて進士の第に落り、二十三歳、江南に歸れりと。嗚呼、是に由りて之を觀るに、彼は幼にして、暖き家庭より、冷かなる社會の潮流に投せられしなり。彼が一生は、己に其初歩より去て困難辛苦の歴史なる兆を顯せしなり。伯兄、會に養はる。その少時の苦辛知るべし。况んや、嫂、鄭氏に従ふをや。彼早く己に社會を見たり。人情の桎梏に遇へり。人口の信ずべからざるを知れり。世情がその學べる六經百家の言に異なる見たり。彼は世人の無邪氣ならざるを悟りぬ。世人の胸中に畜へたる尺度の曲れるを曉れり。彼等の眼鏡の馮むに足らざるを知れり。行の善不善は、人の褒貶に在らずして、道義の上に立つと立たざるに在ることを悟れり。於是

乎、誓て自ら道義の上に立ち、人言を顧みざる決心は起りぬ。此決心は、彼が笈を負ふて京師に至り、力あるものゝ必しも擧げられず、力なきものゝ必しも却けられざるを見て、益、確になれり。否、當世の爲す所、大に其思ふ所に反するを見て、慷慨の情、禁する能はず。已これを匡正せざるべからず、これを匡正すること已の天職なれといふ。觀念さへ加はれり。彼は此くの如くにして、江南には歸りしなり。これを彼が自信の根元となす。

翌年(貞元七年、二十四歳)の末、彼は再び京師に來れり。これ正に陸宣公が寶參(時相)の讒によりて、内職を解き、兵部侍郎を以て貢擧を知るの時なりき。彼は翌年の始、直に試に應じて進士の第に登れり。實に陸宣公の擧る所なりしなり。(七年八月眞拜兵部侍郎、知禮部貢擧、取韓愈等二十二人)陸宣公年譜)明水賦は實に此時の課題なりき。彼は已に禮部の貢擧を卒れり。餘すところは吏部の選舉のみ。彼の前途は漸く幸運に見へぬ。然れども、こは只一時なりき。陸宣公は其年去て相となれり。彼が周圍は暗黒となりぬ。彼が前途は黒雲の爲めに蔽はれたり。彼が困難も亦増し來りぬ。彼が困難に率て、文は益冴へたり。然れども、四邊の忌讒は、益大となりぬ。彼は進士に登第せる年、吏部博學宏詞の試に應じぬ。然れども報せられざりき。翌年復び應じぬ、報せられざりき。翌年彼は三たび應じぬ。然れども亦報せられざりき。時の制を考ふるに、吏部の選舉を司るもの、之を考功と稱し、年毎に人を易へて之に當らしむ。考功は、選舉の試に應ざる進士の文を採て、之を考へ、其三、四を選むで之を中書に致す。而して其選ばるゝと選ばれざるとは、一に中書に在るなり。左れば、一たび考功の掇る所となりたるものも、或は情實を以て、或は賄賂を以て中書に逼り、あらゆる手数を盡して其選まれんことを願ふ。文公嘗て人に與ふる書に、

且執事始考文之明日、浮囂之徒、已相與稱曰、某得矣、某得矣、向其所從來、必言其有自、一日之間、九變其說、(上考功崔虞部書)

と稱せるもの、よく當時の場弊を鑿てりといふべし。如此間に在り、彼が——家に簞石の資なきにも拘らず——その剛腹なる、自から

凡在京師、八九年矣、足不跡公卿之門、名不舉于大夫士之口。

といひ、又

欲事于諷、則患不能小書、困于校刺、欲學爲佞、則患言訥詞直、卒事不成、徒使其躬儂焉、而不終日。

といふの身を以て悪んぞ容易く納れらるゝことを得んや。三たび應じて、三たび罷めらる、固より其所ならんのみ。然れども榮特賢愚を分つゝ千古の同恨、是の時に當り彼烏んぞ、惆悵せざらんや。遂に彼をして

始者謬爲今相國(陸宣公也)所第、此時惟念以爲、得失固有天命、不在趨時、而偃仰一室、嘯歌古人、今則復疑矣、未知夫天意如何、命竟如何、由人乎哉、不由人乎哉、

と言はしむるに至る。然れども、彼は是に因りてその自信を失はざるなり。試に彼が此時ものせる上考功崔虞部書と答崔立之書とを見よ。崔虞部鵬ハ彼が復び博學宏詞の試に應せる時の知選舉なり。彼が文を數十人の間より揀て、之を中書に致せしも遂に黜けらる。而も彼に於て師友の交なく、久故の事なし。於是乎、彼其知遇を感じ、書を上りて、恣に其志を暴す。上考功崔虞部書ハ、實に其牘なりしなり。崔立之は彼の友なり。彼が三たび選に應じて、成らざるを見、身を立つるの門は、此を捨て、他に在らずと爲し、書を與へて、再學を圖らんことを勸む。彼、是に答へて、應試の進士と主司との大弊を

罵殺し、傍ら已が本領を吐露す。答崔立之書ハ實に其文なりき。前には、
凡進士之應此選者、三十有二人、其所不言者數人而已、而愈在焉、及執事既上名之後、三人之中、其二
人者、固所傳聞矣、華實兼者也、果竟得之、而又昇焉、其一人（韓文公）者、則莫之聞矣、實與華違、行與
時乖、果竟退之、如是即可見、時之所與者、時之不與者之相遠矣、然愚之所守、竟非偶然、故不可變。
といひ、後には、

夫所謂博學者、豈今之所謂者乎、夫所謂宏辭者、豈今之所謂者哉、誠使右之豪傑之士、若屈原孟軻司
馬遷相如楊雄之徒、進於是選、必知其懷慙、乃不自進而已耳、設使與夫今之善進取者、競於蒙昧之中、
僕必知其辱焉、然彼五子者、且使生於今之生、其道難不顯、於天下、其自負何如哉、肯與夫斗筭者、決
得失於一夫之目、而爲之憂樂哉。

といふもの、何を其自ら信することの厚きや。彼既に吏部に試みて成らず、又崔立之に答へて然往進
者、豈捨此而無門哉、といひたるもの、京師に區々たるは寧ろ彼の欲せざるところ、彼は遂に東に歸ら
んとせり。然れども、彼空々く京師を去るに忍びざるなり。今人あり、經國の壮志を懷き、千里を行て、
東都に仕を求む。假へ不遇の運に際會することありとするも、憂世の念、何ぞ、その一たび挫折せるが
爲めに飄然此を捨て、以て地方に行き、空しく槽檻の間に駢死するに忍びんや。彼も亦思へらく、尙
一たび己の思ふところを述べ、もし幸にして一たびも遇することあらば、以て己の素願を達し、吾材
を用ひ、吾道を行ふの端緒を得べし、至誠、豈、神に通せざることあらんやと。此くの如くにして翌年
正月二十七日（貞元十一年二十八歳）至誠の情と憂國の念とを以て充されたる上宰相第一書は上られ
たり。此くの如くにして、二月十六日、悲哀の辞を以て充されたる上宰相第二書（後十九日復上宰相

書)は上られたり。此くの如くにして、三月十六日、鏡花水月の法を以て名ある上宰相第三書(後二十
九日復上宰相書)は上られたり、然れども、收められざりき。此時陸宣公は裴延齡の短するに遇ひ、既
に去て相位に在らず。(貞元十年冬十二月陸贄罷爲太子賓客)、趙憬、賈耽、盧邁の徒、空しくその位を
貧りしを以て也。(彼何故に陸宣公相たる時、上書することなかりしや、後章説くことあらん)。年の
五月、彼は遂に心を決えて京師を去れり。東都に行けり。途上彼が感慨果して如何なりしぞ、(彼が歴
史、後章に讓る)是より彼が前途は益崎嶇となりぬ。卑官を得て事、志と違ふこともありき。會、顯官
を得たるも、事をいふによりて貶せられたることもありき。貧ハ益逼りて、今者唯朝夕芻米僕賞之費
是急なる時もありき。要するに、彼が運命の行路に於て遭遇せる幾多の障碍は、彼が爲めに、積極的天
福に去て、その困難の愈増すに従て、彼が自信も、愈鞏固となれり。彼が自信の益鞏固となりたるが故
に、彼が志せる事業も半ば成就せられたるなり。實に彼が一生ハ殆んど彼が内に有せる自信と、彼が
外に有せる社會との、争鬪史ともいふべきか。試に彼がものせる詩文の何れかを取て之を檢せよ。如
何に矯々たる一團自信の氣か、常に章句の間に流露するかを見ん。彼が嘗て

君子不爲小人之恟々而易其行、僕何能爾、委曲從順、向風承意、汲々得合、猶且不免云云。命也、可如
何。(答馮宿書)

といひたるは、世情に従ふ自信を行はんと勉むるをいふ也。彼が
遭脣舌之紛羅、獨陵晨而孤雛、彼檢人之浮言、雖百車其何語。

といひたるは、社會の群集を笑ひたる也。

人生處萬類、知識最爲賢、奈何不自信、反欲從物遷。

といひたるは、自信の理を覺明せるなり。彼が

行之以不息、要之以至死、不有得于今、必有得于古、不有得于身、必有得于後、用此自遣、且以爲知己者之報、(上考功崔虞部書)

といひたるは自信の上に命を安せる也。彼自ら信する此くの如し。故に彼、その信する所を行ふ、固より其難易一切之を顧みざるなり。彼一たびこれを決す。已れの地位も之が爲に捨て顧みざるなり。未來の運命も、之が爲に犠牲に供するなり。否、死をも厭はざるなり。彼已を守るや、自信の上は於てし、已れを行ふや、識分の上は於てす。彼が一生剛腹の觀ありしも、亦宜ならずや。彼が大事を企圖する身を以て、陽山潮州のことなりまも、彼が自信實にその一因たりしなり、嗚呼、彼が早く人口の常なきを觀破し、自ら不偏不倚の大道に立ち、敢て人の毀譽褒貶を顧みざりし行爲は、實に吾人をして激發せしむるに足る。

嘗て白河樂翁公の翁草を閱す。中に清正公が草履取り出來助を取立つる一段の話あり。清正公の善く人を察する、出來助のよく自ら守る所ある、寫し得て妙。君臣水魚の情交、また目覩るが如く、單りここに益あるれみならざれば、長けれど之を左に録しつ。

清正は痔持にて、至極、長雪隱の人なりまに、常に厠に草履はきてあがるは、きたなしとて、高下駄はきて入られしが、ある夜、雪隱の中にて、板ふみならし、獨言に、實にとうよとて、頻りに嘆息したりければ、小姓ども、いぶかりて、何事のねはして、うくは嘆息せさせ玉ふにやと、戸の外より尋ね參らするに、思ひ出ることこれあれ、急に床林隼人めせと、仰出されぬ。隼人は、十虎の内にて、頼みきつたる家老なりしが、其頃は、風邪にて引こもり居たるに、急ぎの召しと聞き、髪も揚げず、追

取刀にて、馳参りしに、日頃長雪隠の大將なれば、また廁の中にればせしに、召されつるは何事にと、戸の外より、尋ね参らすれば、過ぎつる頃、芝居見に、そちと共に行たりし時、そちが召しつれし、あらねの半はさたる草履取は、何と申すぞと、尋ねられしに出来助と申して、年頃奉公にれたらぬものにて侍ると、御答申してけり。さればとよ、其事にて召したるなり。其時かの出来助は、人々の脚絆着たる中に、只獨り當して供せし故、さても奇特のものかな、僅、五、六、年、も、大、平、に、趣、く、と、はや人の心の惰るに、彼のみ治に居て亂を忘れぬけなげさよと、思ひたりしが、いや、く、若我等や隼人など、目とまらせんと、わざと異なる状してけるも計られずと、能々氣を付り居とも知らず出来助の小便せしを見れば、下に饅頭鎖着てみ居たり。さては、いよく、奇特のものよ、うゝるもの褒美すること、大將の本意なれと、思ひ居たりしに、此事かの事を取まされ、忘れいたるが、今夜廁にて、小便するとして、不圖思ひ出之、其故そちを召したるなりと、のたまひながら出でられて、人はあずも知れぬ果敢なき命なれば、今此方か又はそちか出来助三人の内、一人死なば、我心も無くなるべしと思ひ、夜深ながらも、呼寄せぬ。能し取立て得させよと、仰られしうば、隼人の難有とも言ひかねて、涙押えてかしてまゝ居たり。清正公は、今宵は夜もふけぬ。もはや寢所に入なんに、そちは風氣のよし、そこの戸柵に、呑殘しの酒あるほどに、一ツ呑て歸るべし。味噌もある筈ぞと、小姓に仰せて取出させ、寢所に入られんとせしが、又立歸り、急に取立てなば、朋輩の妬ともあるべし。段々に取立得させよとて、内に入玉ひぬ。隼人は賜はりし酒たべて、殿様、今宵は、殊の外、長雪隠あそばされたれば、御風めさぬ様に、能く氣を付けて蒲團掛けて、玉はれとて、立歸りしとかや。云々

嗚呼鬼將軍、人を察す。何ぞ其如斯用意周到なるや。之を世の一善あれば、忽ち以て賢となし良とな

し、一惡あれば、忽ち以て奸となし愚となすの徒に比す。其觀果して如何ぞや。又かの自ら守る所なく、一褒一貶、彼等の言に就て危戚の感を爲すものを取て、之をかの草履取出來助に比す。其觀果して如何かある。

王守仁の詩に曰く。知者不感仁不憂、君胡戚々眉雙愁、信步行來皆坦道、憑天判下非人謀、用之則行舍即休、此身浩蕩浮虛舟、丈夫落々掀天地、豈顧束縛如窮囚、千金之珠彈鳥雀、掘土何煩用鋤鎌、君不見東家老翁防虎、患虎夜入室銜其頭、西家兒童不識虎、執竿驅虎如驅牛、痴人懲噎遂癡食、愚者見溺先自投、人生達命自灑落、憂纔避毀徒啾啾（陽明先生詠學詩、啾啾吟）是、心よく大虛に達之、身よく良知を明かにせる人にして、初めて望むべきことなりと雖ども、然れども苟も事を成さんと欲する者、又此くの如き氣概なくんばある可らず。萬里中秋月正晴、四山雲靄忽然生、須臾濁霧隨風散、依舊青天此月明。雲霧一たび拂へば、元是靈臚たる心性、人々何ぞ遠く相去ることあらんや。嗚呼、胸中活大の氣、人の之を養するも、其活大たるを増さず、人の之を譏るも、亦其活大たるを滅せざるなり。賤者之れを貶する可なり、貴者之を褒る可なり。吾の我たるに於て何の關することか之れ有らん。我何ぞ以て憂ひ、以て喜ばんや。夫、大道ハ天地の大道にして、一個一人の私にあらざるなり。夫惟、天地の大道なり。故を以て、信じて天地の大道に立つものは、人の褒貶毀譽、固より其顧みる所にあらず。斷々乎と之て其爲すべき所を爲し、其行ふ可き所を行ふ。毅然たる大丈夫、當に此くの如くなるべし。若夫、此の大道に立たんことを思はず。下の一言以て憂ひ、上の一言、以て喜ぶ。一喜一憂、一舉一動危戚の感を爲すに至ては、是徒に外に依頼して、胸中活大の氣を信せざるもの、焉ぞ社稷の大任を双肩に負ふて、世譽の外に立ち、以て國家百年の經綸を施すことを得んや。文公伯夷頌劈頭題之て、士之特立獨

行、適于義不顧人之是非、皆豪傑之士、信道而自神明者也、と曰ふもの、蓋、こゝに意ありし。

彼が自信や此くの如し。彼が本領果して如何なりしぞ。請ふ、余をして次の數章に於て之を語らしよ。
(未完)

文苑

鬮髑の記

中内蝶蝶子

神無月のころ、ゆくりなくたち出て、そこはうとなく、人も通はぬあら野のうちをありきけるに、水田のうちには、弓もてたてたる案山子の寒けなる、枯れ伏したる草むらに、すゝき尾花の折れながらにたてゐる、いづれともなく物あはれなり。猶そのなかをたどりゆくに、丸らかなる物の杖にふれける。いづなるものにかある、とよくみれば、こはいづにあさましき一つの鬮髑にぞあるける。雨にあらはれ、風にさらされ、いくばくの月日をうへにけん、身の毛もよだつて、うちぞしける。

抑も此鬮髑はよ如何なる人にありけん。富めりし人か、貧しかりし人か、この泰平の御代にありて、何如なる罪ありて、人に殺されにし。跡にをさむる人もなきは、はたいかなる故ぞや。あはれ世に生ける間こそ、美醜貴賤のけぢめはあれ。魂魄ひとたび去れば、みなこの鬮髑にぞありける。げにも、身の後にこがねを残して、北斗をさぶども、人のためにぞわづらはるべきと、昔の人の云ひける。知らず、今の世の人何の

波瀾起伏の處尤觀るべし